

て、病者<sup>びやうしや</sup>ころよきにいたるなり。これを酒湯<sup>さかゆ</sup>といふ(巻五)とあり、迷信的などころも一部残っている。

最後に本書の出版には、中村氏による牛山の2著の訳注に協力を惜しまなかった農文協の編集者、泉博幸氏の存在がある。泉氏は『安藤昌益全集』(全21巻)の訳注も手掛けており、古文・漢文、江戸時代の民俗や医学にも詳しく、看護史研

究会で発刊した平野重誠『病家須知』の翻刻のときにも協力していただいた。本書の定価は1600円、限定300部とのことである。

(平尾真智子)

〔農山漁村文化協会、〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1、TEL. 03(3585)1141(代表)、2016年3月、A5判、248頁、1,728円(税込)〕

吉元昭治 著

## 『内経・神農本草経 分析』

今回、日本医史学会で長年活躍されている吉元昭治先生が標記の書を上梓された。同じ中国伝統医学に興味を持つものとして、本書の紹介ならびにデータベースとしての感想を述べさせていただきます、その責務をはたしたいと思う。

当然のことながら伝統医学のベースになっているのは、古典文献である。鍼灸で言えば『内経』(素問・靈枢)『難経』、湯液で言えば『傷寒論』『金匱要略』『神農本草経』である。いずれも難解であり簡単に理解しえるものではない。古典の解説書としては、現代語訳の意訳、新釈シリーズ(小曾戸丈夫、小曾戸洋)などで、その理解は容易になってきた感はあるが、本格的に伝統医学を臨床応用しようと思えば古典は高いハードルである。

本書の書名にある「分析」というタイトルは、興味津々であった。本書は『内経』『神農本草経』の註解本ではない。また古典の一字索引、章句索引、用語索引でもない。『内経』『神農本草経』の複雑、煩雑な部分、特に医学基礎理論の部分の分解、整理、再構築した「分析」に重点を置いた、今までに無い本である。

本書の内容は『内経』の(1)表解、(2)成句分類、(3)分解、さらに『神農本草経』の(4)表解という四部構成になっている。

「表解」とは、『素問』『靈枢』『神農本草経』の各論編の内容をく表形式にまとめ整理したもの。具体的には、『素問』の上古天真論 第1では、表①として、男女分け、年齢分け、成長の内容を一

覧の表にしてある。四気調神大論 第2では、表②として、春夏秋冬の四季の気候の変化と疾病予防の表である。以下『素問』では94の表、『靈枢』では196の表が収められている。

「表解」は、各論編ごとに天地人、陰陽、身体、臓腑、四季、東西南北などの古典用語の基礎的な内容を簡単明瞭に表にしたサブノートのようなものであるが、思考を整理するには極めて有効な手段である。

また「表解分類一覧表」というページを設け、表解部分を項目ごとに分類整理し一覧にした表がある(『素問』38項目、『靈枢』42項目)。これにより、基礎医学のキーワード、例えば「陰陽」は、表⑤⑥⑦⑧⑨⑩……等とあり、原文の参照が用意である。項目索引のように作られていて、この整理方法は古典の整理分類のアイデアとして大いに参考にすべきと感じた。

「成句分類」とは、成句(章句、熟語、フレーズ)をまとめた分類である。本書では40の成句が紹介されている。具体的な例で言えば、「百病」という成句に対して、

「風者百病之始」(『素問』生氣通天論 第3)

「風者百病之長也」(『素問』玉機真藏論 第19)

……,

「百病之始期也、必生于風雨寒暑」(『靈枢』五变 第46)

など「百病」に関する成句を11例、抽出整理し

である。これにより「百病」と「風」の関係が浮き彫りになるのがわかる。

「分解」とは、『内経』各編の内容を合わせて理論面と臨床面に大別、さらに陰陽、五行、天地人、養生などの内容を原文のまま抽出し整理したものである。これは先の「成句」では検索、抽出不可能な〈内容〉からの引用抜粋で、古典を読み込んでいないとこの整理は不可能である。本書では、(1) 天地人、(2) 陰陽、(3) 四時・四季、(4) 五行・臓腑、(5) 養生・人の一生の5項目をまとめてある。

『神農本草経』では39の表解、15の図が紹介され、それぞれの解説がされている。

本書は以上のような構成になっているが、この「表解」を見たときに、鍼灸を学ぶものは『鍼灸神髓』（代田文誌著）にある「五臓之色体表」と「十二原之表」（『難経鉄鑑』より引用）、学校教科書の「手足の十二経脈と井榮兪経合の表」「相生相尅の図」などを思い浮かべるのではないだろうか。逆に言えば、その程度しか、表解がされていないのを感じてしまう。参考までに、江戸中期の難経解説書『難経鉄鑑』（広岡蘇仙著）にある「難経図」などは、一難から八十一難までことごとく表形式、図形式にまとめられていて、読む者の理解を助けてくれる注釈本である。

「成句分類」としては、江戸の考証学者・山田業

広が『内経』・『難経』の内容を項目ごとに分類編纂した『医経声類』（1868年）がその先駆的な文献であろう（完成までに21年を費やした）。吉元先生が本書完成までどれだけの時間を要したかは分からないが、山田業広と同じく、相当の年月と情熱を注いだことであろう。

本書の中で吉元先生は「一度、『素問』『霊枢』を分解し、掃除して、分類してみたらかねがね思った。（略）——或る学会で『素問』『霊枢』の分解を提案した事もある。しかしその後も反応なく、それでは自分で一つしてみようとおもった。それが字句、表解と今回の成句分類になった。」と述べている。これは著者が本書の執筆動機を淡々と述べているようであるが、私達読者へのさらなる研究、発展を希望する強烈なメッセージではないだろうか。方法論は述べた、あとは君たちも頑張れ、と言っているように感じられる。本書は、理論部分を中心にまとめられているが、臨床部分は未着手である。この労作は中国医学古典の基礎理論を学ぼうとする人、また古典をもう一度整理して読み直したい読者には、強くお勧めする次第である。

（小林 健二）

〔医聖社、〒101-0065 東京都千代田区西神田2-7-4 島崎ビル6F、TEL. 03 (3264) 8639、2016年7月、B5判、171頁、3,800円＋税〕

## 書籍紹介

日本薬史学会 編，奥田 潤・西川 隆 編集代表

### 『薬学史事典』

日本薬史学会は、日本医史学会とは浅からぬご縁がある。毎年12月には医療系の歴史の6つの学会が合同で例会をもち、その編集長と学会代表が集まって編集者会議も行っている。その日本薬史学会が総力を挙げて薬学の歴史を俯瞰する巨大な労作『薬学史事典』を刊行されたことは大いに敬意を表するものである。

薬学の歴史と医学の歴史とはたがいに深く関わっている。実際『薬学史事典』の内容を見ると、薬学の歴史だけでなく、医療の歴史についても少なからぬ頁を割いている。

日本の薬学史：総論（6項目）、各論（125項目）

日本の医療史：各論（28項目）